

# 症例から考える 第1回

三谷 和男 京都府立医科大学東洋医学講座

## 症例 1

38歳の女性。B型肝炎キャリアーからの発症である。トランスアミナーゼが急激に上昇（800～1000 IU/l）し、大阪市内の拠点病院で治療を受けるも、なかなか下がらないということで来院された。

舌質の色調は深紅で、いわゆる「紅舌」の所見である（写真1）。筆者は経験上、B型肝炎に対しては、柴胡剤を徹底することで寛解状態にもっていけると考える。症例3（次号掲載予定）でC型肝炎についても述べるが、こちらは非A非Bと呼ばれていた頃より、「なぜ柴胡剤の適応が少ないか？」が医局でも話題に上っていた。B型肝炎の目標の1つが紅舌であり、さらに茸状乳頭のうっ滞も大きなポイントである。

以前にも述べたが、舌苔の性状は「潤・燥・厚・薄・浄・膩・垢・剥など」と表現され、一般的に正常とされる苔は、「薄い白浄苔が一様に付着し、舌質はやや湿潤」である。浄苔は糸状乳頭の1つ1つの判別が可能であるが、これに対して膩苔は糸状乳頭の発育が旺盛で相互に連絡しているように観察できる状態、あるいは生理的範囲を超えた厚い苔といわれる。膩苔はおからをペースト状に引き伸ばしたような性状で、裏熱つまり内臓の熱の反映である。

このように、確信をもって柴胡剤による治療をスタートしたが、半年ぐらい経過しても検査データは依然として高値であり、舌所見にも著変は認められない（写真2）。その後も小柴胡湯を継続する。

8カ月くらいから舌所見（舌苔）に変化がみられ出した（写真3）。黄膩苔が少しずつ浄苔に変化してきた。肝機能（GOT・GPT）の数値も少しずつ下がってきた



写真1  
「紅舌」の所見



写真2  
著変なし  
(4カ月後)



写真3  
黄膩苔から浄苔  
に変化し始める  
(8カ月後)

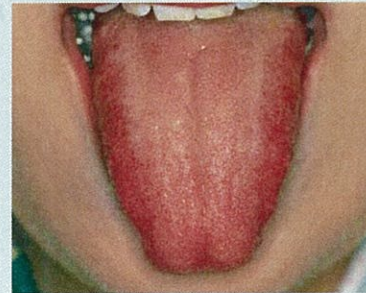


写真4  
黄白浄苔になるが、  
紅舌は変わらず  
(2年7カ月後)

(それでも 150 ~ 200 IU/l レベル)。しかし、舌質の判断でも紅舌は変わらず、炎症の持続が考えられる。改善と、変化なしが混在している。舌診では、改善・非改善・増悪を見分けることができるという意味からも、大切な望診の一環であるといえる。

2年7カ月の時点で、苔は黄白浄苔となり、検査データも GOT, GPT とも 50 IU/l を切り、その他の所見（血小板数・膠質反応など）も正常範囲であるが、紅舌の所見は変わらない（写真4）。患者さんに倦怠感などの自覚症状はなく、診察の間隔も延び延びになりがちであるが、定期的な検査（血液検査・CT・腹部超音波検査）の継続を厳しく指導している。「検査ばかりされる」との指摘もあるが、舌所見は予断を許さないことを示唆している。「どうして検査データは落ち着いているのに、こんな頻繁に検査をするのですか？」と問われたとき、「それはね、あなたの舌がそう語っているからですよ」とは言えない。でも紅舌は厳格な炎症の管理が求められるのも事実である。舌の変化のスライドを見せて、「舌苔は薄く改善していますが、この紅い色調は変わっていないんですよ。内服薬の継続と血液・画像検査は重要です」と繰り返し説明している。炎症と腫瘍が隣り合わせである以上、いつ SOL が現れてもおかしくない所見である。

## 症例 2

48歳の女性。自覚症状はなかったが、健康診断で肝機能（トランスアミナーゼ）の異常を指摘された（GOT260 IU/l, GPT324 IU/l）。この患者さんは、舌診上、最初何を所見とみるべきか迷った（写真5）。B型肝炎の典型例とは明らかに舌質の色調が違う。この方の舌質は淡紅色で、茸状乳頭のうっ滞を認める。そこで、まず、いかにも「水の捌き」が悪そうな水滞の所見に焦点を絞り、利水作用のある茵陳五苓散を処方した。

第2診では、舌の前部に亀裂が出現していた（写真6）。舌診では、なんとなく水っぽい（痞軟の所見）というだけで水滞と決めつけるのは早計であるし、根



写真5  
舌質は淡紅色で、  
茸状乳頭のうっ  
滞がある

写真6  
舌の前部に  
亀裂が出現

写真7  
亀裂の経過を  
観察

拠もない。あくまでも、治療的診断によるが、この患者さんの場合は、水滞が改善することで、結果として亀裂が生じたわけであるから、これは茵陳五苓散の効果によるものと考えられる。

亀裂だけなら気虚とみるが、この患者さんの場合、水の滞りによって亀裂が消えるところに問題があるとみる。舌の色調は光量の加減で少し違うが、亀裂の経過観察（水滞により亀裂が消失するかどうか）がポイントと考える（写真7）。

西洋医学的診断は自己免疫性肝炎で、大阪S大学の消化器内科との共患として診ることにした。治療開始後数カ月はトランスアミナーゼの低下がみられず、ステロイド治療も提案されていたが、その後安定した経過が得られ、大学では主に画像による経過観察のみの方針が出された。